

Kansai City Philharmonic Orchestra

The 40th
Eine Heldenleben op. 40th
Subscription Concert



関西シティフィルハーモニー交響楽団
第40回記念定期演奏会

2005年9月4日(日) 14:30
ザ・シンフォニーホール

主催 関西シティフィルハーモニー交響楽団
協賛 株式会社 ASK PLANNING CENTER, INC.

関西シティフィルハーモニー交響楽団

ウェーバー 歌劇「オベロン」序曲

ドビュッシー 小組曲

アンリ・ビュッセル編

1. En Bateau(小舟にて)

2. Cortège(行列)

3. Menuet(メヌエット)

4. Ballet(バレエ)

休憩



リヒャルト・シュトラウス 交響詩「英雄の生涯」

ヴァイオリン・ソロ 西田美音子

1. 英雄
2. 英雄の敵
3. 英雄の妻
4. 英雄の戦場
5. 英雄の業績
6. 英雄の引退と完成





阿保 幸雄

Sachio Abo

関西シティフィルハーモニー交響楽団団長

本日は、私共の第40回記念定期演奏会によくそお越し下さいました。

今回はアマチュアがこんな曲をやってもいいのだろうか?と
思える程の大変な難曲R.シュトラウスの<英雄の生涯>を
演奏いたします。団員一同いつもにも増して必死になって練習
してきた成果をお聴き頂きたいと思います。又、この曲の
ヴァイオリンソロは、あらゆるヴァイオリン協奏曲のソロより難
しいと言われていました。今回は我がコンサートミストレス西
田美音子がこれに挑戦致します。ご期待ください。

本日指揮をして下さる伊藤翔氏には、昨年3月に当団の
第37回定期演奏会にも御登場願いました。ブクナーの9
番の交響曲を21歳の若さで見事に指揮され、多くの人々に
感銘を与えられました。以後、関西でも3つのプロの交響楽
団を指揮され、その大器ぶりを遺憾なく発揮されています。
今後はウィーンで修行されるそうですが、将来が本当に楽し
みな指揮者であります。

良い指揮者と良い指導者の先生方に恵まれて、私たち
のオーケストラは演奏会の回を重ねる毎に成長しているよう
に思われます。これも、平素より私共のオーケストラ活動に深
いご理解と、暖かいご声援を頂いている皆様方のお陰であ
ると感謝いたしております。

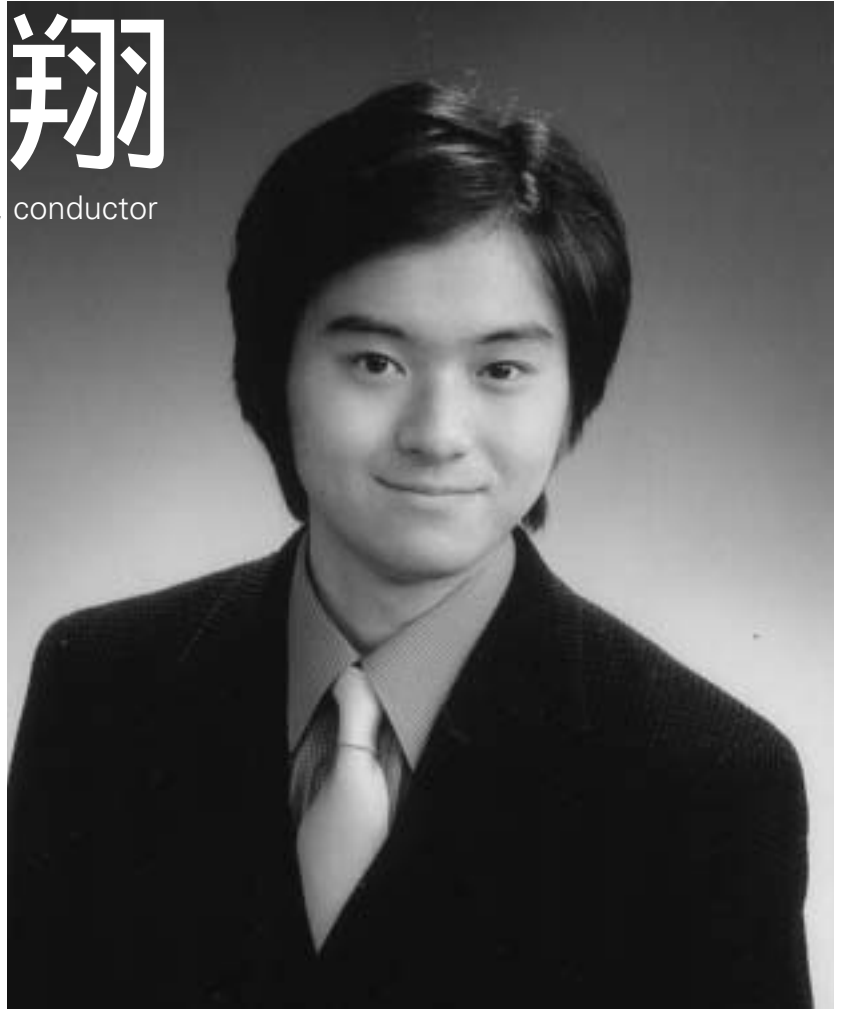
さて、前団長松田斉氏の後を引き継いで今年度から私
が団長の重責を担うこととなりました。前団長のような立派
な団長にはなれそうにもありませんが、私なりに精一杯、団の
ためにお役に立てればと思っております。

何卒、前団長同様、よろしく願い申し上げます。

関西シティフィルハーモニー交響楽団 (社)日本アマチュアオーケストラ連盟加盟団体 | 大阪文化団体連合会会員団体 | 1974年各大学オーケストラの卒業生を主たるメンバーとして、関西OB交響楽団の名称で結成。1994年創団20周年を機に現在の団名に改称。“アマチュア精神に基づく、グレードの高い社会人オーケストラ”をモットーに、年間2回の定期演奏会をはじめファミリーコンサート等を、意欲的に開催しています。近年は指導体制の充実に力点を置き、有能なプロの先生方を指揮者や指導スタッフに招請して研鑽を積んで参りました。中でも、1998年より4年間、ズラタン・スルジッチ氏(現ザグレブ放送交響楽団芸術監督)を常任指揮者に招聘し、その指導を仰いだことにより「音楽的に大きな飛躍を遂げた」との評価を内外から得ております。また組織としても「若い力」を積極的に運営面に活かし、“常に成長するオーケストラ”を目指して努力を重ねております。2004年8月に大阪市で開催された「全国アマチュアオーケストラフェスティバル大阪大会」では、開催主管団体として、当団の組織力を遺憾なく発揮し、フェスティバル成功の原動力として、連盟をはじめ全国のアマチュアオーケストラ各位から、高い評価と大きな賛辞を頂くことができました。毎週土曜日の夜、指揮者やトレーナーの先生方の指導のもと、真剣な練習を行っており、現在団員数は、約100名を有します。

伊藤翔

指揮 Shou Itoh, conductor



8歳より母親の手ほどきでピアノを始める。まもなく指揮を志し、ヴァイオリンと作曲を学び、桐朋高等学校音楽科(作曲専攻)入学。

在学中に指揮法を学び、2001年推薦により桐朋学園大学(指揮専攻)入学。

高校在学中より学生オーケストラによる学内外での指揮活動を始め、2001年春にはクラクフ国立管弦楽団(ポーランド)の東京公演においてベートーヴェン交響曲第1番を指揮。

2001年マゼール国際指揮者コンクールにおいて最年少出場者として、セミ・ファイナルに出場、2003年ローム音楽セミナー指揮部門(指導:小澤征爾氏他)を受講。

ピアノでは2000年第16回日本教育連盟ピアノ・オーディション入賞をはじめ、いくつかのコンクールにおいて上位入賞を果たす。

また、ピアノソロ及びコンチェルトのソリストとしていくつかの演奏会に出演するほか、多くの学内外のコンサート、コンクールにおいてピアノ伴奏を担当している。

これまでに、ピアノをイエルク・デムス、アンドレ・S・サボア、斉木隆、藤井一興、ヴァイオリンを小島秀夫、篠崎功子、作曲を三瀬和朗、指揮を黒岩英臣、秋山和慶、上杉隆治、高階正光、湯浅勇治の各氏に師事。

2004年京都市交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、2005年大阪センチュリー交響楽団を指揮。

現在、桐朋学園大学(指揮専攻)在学中。

ウェーバー 歌劇「オベロン」序曲

ウェーバー(1786~1826)は、ドイツ・ロマン派の初期に位置する作曲家で、交響曲を初めとする管弦楽曲や、室内楽曲、ピアノ曲、声楽曲などを残しているが、特に注目すべきは、オペラの作曲家としてのウェーバーである。彼はドイツ語による民衆的なオペラを確立したという点で、ドイツ・ロマン派オペラの創始者として、音楽史上重要な位置を占めている。

本日、序曲が演奏される歌劇「オベロン」は、「魔弾の射手」や「オリアンテ」の成功のあと、ロンドンのコヴェントガーデン王立歌劇場からの依頼に応じて作曲されたもの。1825年の初めに作曲に取りかかり、翌年1月にほぼ完成させた。1826年4月、ウェーバー自らの指揮によって、コヴェントガーデンで「オベロン」を初演、大成功をおさめたが、無理がたたリ、ウェーバーは初演後2ヶ月たらずで結核のためこの世を去ってしまう。そして、「オベロン」はウェーバーにとって最後のオペラとなったのである。

「オベロン」は、ウィーラントの叙事詩「オベロン」の英訳に、シェイクスピアの「真夏の夜の夢」と「テンペスト」をあしらった物語を持ち、その内容にふさわしく、きわめて幻想的な音楽が書かれている。しかし今日では、歌劇全体としては台本の稚拙さが原因して、オペラとして上演されることはほとんどなく、序曲だけが管弦楽曲の傑作としてしばしば演奏される。

歌劇「オベロン」は、妖精の王オベロンが、人間の若者カップルの誠実さによって、妻ティタニアと仲直りするという物語。序曲は、オベロンの角笛を模したホルンのソロに導かれる緩やかな序奏(アダージョ・ソステヌート)で始まる。そのあと、第1ヴァイオリンの速い快活なパッセージによってアレグロ・コン・フォーコの主部に入る。クラリネットの魅力的なソロも登場する、ロマンティックで華やかな序曲である。

そこには死期の近づいた人の筆致とは思われないほどの活気があり、管楽器の巧妙な用法がある。

ウェーバーの描いた妖精の不思議な世界、熱烈な愛などを、本日もみなさまと共に感じられるよう演奏したいと思います。

平下祐子(ヴァイオリン)

ドビュッシー 小組曲(アンリ・ビュッセル編)

「小組曲 - ピアノ連弾のための - 」は、フランスの作曲家クロード・ドビュッシーによって1889年に作曲されました。オーケストラ版は友人で指揮者のアンリ・ビュッセルが編曲(1907)しましたが、その仕上がりが「牧神の午後への前奏曲」(1894)、「夜想曲」(1900)、「海」(1905)などで印象主義を確立した、ドビュッシー独特の管弦楽法を隅々まで取り入れた、色彩豊かなものになっています。一般的な2管編成(トロンボーンは含まない)にハープ、そしてトランペット、ホルン、弦楽器とも弱音を駆使するなど、様々な音色の組み合わせが、音のキャンパス一杯に印象的に広がります。その完成度について、今回指揮を下さる伊藤先生は「一音の不足も無駄もない、オーケストレーション(管弦楽への編曲)の教科書」だと私達に紹介して下さいました。

第1曲 En Bateau(小舟にて)

フルートの美しくゆったりしたテーマで始まります。冒頭からハープの分散和音による水面のきらめきと、それに弦楽器がやさしく加わる波のうねりの心地良さにより、曲が始まった瞬間に聴く者のイメージが膨らみます。そしてわずか5小節の和声進行でドビュッシーらしい斬新で神秘的な遠近感が淡くもし出されるのです。中間部では、それまで胸に秘めていた内面の生気が一気に湧き出し、ヴァイオリンによって舟歌が奏されます。管楽器が様々に加わり舟歌の活気に彩りを加えた後、やわらかなさざなみに乗せて冒頭のテーマを再現し、夢見心地のまま曲は閉じます。

第2曲 Cortège(行列)

木管楽器が軽やかな流れの茶目つきたっぴりな行進を表現します。「鹿皮お仕着せ猿の露払い / ちょこちょこひんどはねてゆく」というヴェルレーヌの詩をヒントに、貴婦人のお供をする従者のいたずら心が表現されています。トライアングルやシンバルなど、高い倍音を響かせる打楽器が軽やかなステップを演出し、雰囲気盛り上げます。中間部のスケルツァンドを経て、再び冒頭のメロディに戻ると、終結部では、金管楽器のテーマで曲を引き締め、最後にはピアノ版にはないティンパニのトレモロが加わり力強く曲を締めくくります。

第3曲 Menuet(メヌエット)

他の3曲では、曲の始まりの瞬間から、物語のイメージが目の前に広がるのに対し、この曲には短い前奏がついています。前奏の後には、ヴァイオリンの物憂げな古風でしっとりと美しい舞曲が続きます。中間部ではファゴット、ホルン、ヴィオラが奏でる心温まるメロディが演奏されます。この曲には、パトロンでドビュッシーが愛したヴァニエ婦人に奉げた歌曲のメロディを引用しており、前の2曲がデュエット(2重奏)を多用しハーモニーを使って豊かな雰囲気を演出するのに比べ、この曲ではメロディーラインが単独で演奏されることが多く、その分くっきりと浮かび上がる主旋律が、まるで作曲者のまっすぐな恋心を表しているかのように響きます。

第4曲 Ballet(バレエ)

木管の軽快なビートに乗って、華やかな踊り子たちの雰囲気がいきなり飛び込んできます。中間部にはうっとりするようなワルツが挟まれています。トライアングルがおしゃれに締めくくった後、もう一度アレグロの舞曲に戻り、金管楽器の壮大なワルツへ導かれ、最後はフルオーケストラによるグランドフィナーレが、駆け込むように一気に終結へ向かいます。

「小組曲」は、伊藤先生自身が何度もピアノ連弾を楽しんでこられたお気に入りの曲だとか。「(指揮者することになった)大好きな曲のスコア(指揮者用総譜)を見て初めて難しさを知る…」と研究熱心なお話をされつつ、大好きなフランス音楽のエッセンスを凝縮したこの曲への情熱に、話は尽きません。楽譜は単なる演奏家への指示ではなく、演奏家一人ひとりが輝けるための「演奏家への思いやり」であることを、この優れた編曲に教えられた、と語る伊藤先生は「オーケストレーションは人間性そのものですね」と結ばれました。

森修二(トランペット)

リヒャルト・シュトラウス 交響詩「英雄の生涯」

フェスティバルホールでカラヤン指揮ベルリンフィルの「英雄の生涯」の演奏会があった。といっても1966年(昭和41年)ころのこと。どのようにしてチケットを手に入れ誰と聴きに行ったのかも覚えていない。しかし出だしのホルンと低弦の「たーたーたたたたー」という強烈なメロディー(どんなメロディーかこれではわからないって、本日のお楽しみに)は忘れられない。またそれとは一転して第3部には英雄の妻の性格を描写するヴァイオリンのソロが延々と続き、非常に印象深い曲となった。その英雄の生涯を今日、このザ・シンフォニーホールでアマチュアの我々が演奏することになるうとは当時(つい最近まで)思いもよらぬことであった。しかもヴァイオリンのソロは我がオーケストラの常任のコンサートミストレスである西田美音子嬢であることも我が関西シティフィルとして誇りとするところである。

この曲は難曲でアマチュアオーケストラではほとんど取り上げられない曲であるが、今日の演奏会是我々関西シティフィルが大決心をした挑戦であるといっても過言ではない。

シュトラウスは8曲の交響詩を作曲しているが「英雄の生涯」はその最後のものであり、1898年(作曲家34歳)の作品である。この曲が変ホ長調でベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」と同じ調性であることから「英雄」を意識していたと言われている。英雄というのはシュトラウス自身の事を指していると考えられる一方で作曲したのが34歳の若さである事を考慮すると一般的な英雄と考える方が適当だとする意見もある。

この曲が書かれたころにはシュトラウスは既に作曲家・指揮者としての名声を得ていたが、この曲の初演では保守的な聴衆の多くが退場したということである。

第1部「英雄」

先にも述べたように序奏がなくいきなりホルンと低弦を中心とした英雄の主題が演奏される。ベートーヴェンの英雄交響曲と同じ変ホ長調である。この主題は曲全体に形を変え何度となく現れる。この曲は途切れることなく全曲を続けて演奏されるのでどこからそれぞれの部が始まるのか分かりにくい。第1部はフォルテ3つの後のゲネラルパウゼ(総休止)で終了する。

第2部「英雄の敵」

ここで言う英雄の敵というのはシュトラウスの足を引っ張ろうとする音楽批評家たちの事。第2部はゲネラルパウゼの後の突如雰囲気の違い3拍子で何調か分からないような旋律が始まる。木管楽器による旋律に続き、テノールチューバ&バスチューバによる5度の和音などが特徴的である。途中から一転して英雄のテーマが現れるが第2部最初の木管のテーマが重なり最後は英雄が敵に立ち向かう様子を表す。

第3部「英雄の妻」

初めてヴァイオリンのソロが現れるのが第3部。彼の実際の妻、パウリーネを描いている。前半は妻の性格を描写するヴァイオリン・ソロが続くが、ソロへの指示は「わざとらしくなだれる」「おどけた」「軽率に」「はしゃいで」「ふざけて」「愛嬌のある」「荒れ狂った」「怒って」「罵る」「優しく愛らしい」など音楽的表現よりは性

格表現が中心である。前半はヴァイオリンのソロのカデンツァと低弦の対話からなる。この後2人の愛の場面を描いて盛り上がり、再び静まっていく。

第4部「英雄の戦場」

舞台の裏から3本のトランペットファンファーレが聞こえてくる。このあたり変ト長調で第2ヴァイオリンは最低音のソをソに調弦を変えて演奏する。軍隊の行進を想像させる小太鼓のリズム、大砲の音を表す大太鼓等、打楽器の数も一気に増え、大編成のオーケストラになり次から次にこれでもかと言うほど繰り出され、ついに英雄は勝利を勝ち取る。

第5部「英雄の業績」

英雄すなわち作曲者自身の作品の主題が次々と現れる。その作品は以下の通り。「死と変容」「ドン・キホーテ」「ドン・ファン」「テイル・オイレシユピーゲルの愉快ないたずら」「グントラム」「マクベス」「解き放たれて」「たそがれの夢」「ツァラトゥストラはかく語りき」だそうで、これが判る方は相当のクラシックマニア。

第6部「英雄の引退と完成」

イングリッシュホルンによる主題の中、英雄は平和で静かな余生を送る。妻と共にかつての戦いなどを回想しながらその人生を締めくくる。後半にあるほとんどの楽器が細かい音符を演奏するひとくたがりが済みヴァイオリンソロに受け渡された時の感激は言葉に言い尽くし難いものである。そのソロも終わり最後に弦楽器以外の演奏で終結する。

この曲を1曲じっくりと聴きとおした時にひとつの長編のオペラを見終わったような感激を持ったのは私だけでは無いと思います。今日の演奏で一人でも多くの聴衆の皆様がそのような感動を持っていただけるような演奏が出来るよう団員一同頑張ります。

豊島正(チェロ)

若きホープ

伊藤翔先生に注目!!

ドキュメンタリータッチで...

2004年3月27日、第37回定期演奏会。

伊藤先生が指揮するブルックナー9番は、終わりに近づくにつれて、何か荘厳な気配に包まれていった。そして最後の和音が静寂の中に消えた時、それは天に昇っていった。奇跡が起こったと思った。

私たちの演奏能力はつたない。当時の彼の指導にもつたなさがあった。しかし本番の彼は、これらのつたなさを超越して音楽を完成させた。彼の深い音楽性と、指揮者としての可能性が発露したのである。

私たちは彼との再演を願った。

*

伊藤先生が指揮者を志したきっかけは？

伊藤先生(以下S): 家には古いLPレコードのコレクションがあったので、4歳ごろからこれらを聴いていました。特にオーケストラ曲を聴いているときには、宇宙にはどこかに中心があって、すべての曲がそこに向かっていくような気がしていました。それで、自分もそこを目指したいと思ったわけです...

そのころはボリュームのつまみを握って、自分でクレッシェンドしたり、デミニュエンドしたり...これは自分で指揮するしかない...でも、両親はなかなか本気で取り合ってくれず、8歳ごろになってようやく、本格的に音楽を勉強させてもらうようになりました。

目標とする指揮者はいますか？

S: 目標ではありませんが、このころたくさん聴いたフルトヴェングラーの録音は、僕にとって音楽の原風景のようなものです。それと、指揮を自分で勉強するようになって分かってきたのですが、カラヤンは表現の技の多彩さと言うか、すぐには分からないようなところでものすごくたくさんの工夫をしていて、凄いですね。

指揮者として一番大事なものは？

S: うまく言えませんが、自分の音楽的なイメージを掘り下げて、はっきりさせること...それが自然に伝わること...これは指揮の技術だけではないと思いますが、いずれにしても自分が確信を持っていないことは、人に伝わりようが無いと思います。

オーケストラに求める一番大事なものは？

S: 音楽の「息遣い」と言うか、呼吸のようなものを、全員が共有できること...そのためには音のバランスについて、メンバーが互いに理解することが大切だと思います。

本番前は緊張しますか？

S: 本番前は、緊張するというより、「これもやっていない、あそこも時間が足りなかった...」などとばかり考えて、逃げ出したいくなります。本当に近づいてしまうと、気持ちが開き直るのですが。

本番前に験を担ぐ事ってありますか？

S: アップルジュースを飲むとなぜか気分が落ち着くので、そうしています。汗をかくので、水分補給も大切ですから...

*

2年前、私たちは客演指揮者を捜していた。金銭的に負担の少ない「有望な若手」が希望であったが、そんな折り、東京の下野達也先生より紹介して頂いたのが彼であった。

しかし考えてみれば、たとえアマオケであれ、弱冠二十歳の学生がいきなりシンフォニーホールで「未完成」&「ブルックナー9番」を振るのだから、これはすごいチャンスである。さらにこの日の演奏は関西のプロオケの目に留まり、後に京響、大フィル、大阪センチュリーが彼を招聘することとなる。

才能を開花させるには、強運も必要だ。

*

クラシック以外ではどんな音楽が好き？

S: クラシックでも、民族的なものは特に興味があるので、その延長がかもしれませんが、フランスのシャンソンなどは好きです。人生に肯定的で、いいですね。

音楽以外で興味あるものは？

S: 絵を描くこと。

もし指揮者を目指していなければ、何をやりたい？

S: 画家の生活は、自分の好きな事と希望のライフスタイルが一致しているので、いいなあと思います。また、あまり忙しななければ、ピアニストの生活はあこがれますが...

いつもきっちりした服装で練習に来られてますが、普段からそうなんですか？また、自分のファッションセンスをどう思う？

S: カッコいい体型とは程遠いので、ファッションセンスを発揮するのは困難です...何とか見られる格好をすると、どうしてもこうなります。家の中では、冬は丹前などを着ていますが、これはすごく楽しい!!

生まれ育った町を教えてください

S: 4歳まで 英国(ノーリッチ市)
15歳まで 鳥根県松江市、
23歳まで 東京です。

*

彼は本当に愛すべきキャラクターである。非常に謙虚で礼儀正しく、かつ全く嫌みが無い。今風の若者であると同時に、サラリーマンたちの下世話な話題にも、真剣に耳を傾けてくれる。だから私たちは彼に魅了され、協力を惜しまない。もしかしたら下野先生も、私たちと同じ気持ちだったのだろうか？

そして彼はまた、愛すべきルックスの持ち主でもある。

*

理想の女性のタイプは？

S: 理想は、かわいくて音楽に理解があり、

僕の我儘には無限に寛大な人。

社会人オケは大体伊藤さんより年上なんですが...年上の女性もOK?

S: 年齢はあまりこだわりません。

伊藤さんの恋愛観は?

S: 恋愛観は保守的かな?

駆け出しの指揮者は生活が苦しいと思うけど、結婚はどうする?

S: 指揮者はお金があってもなくても生活は大変なので、結婚は悲観的です。

練習後の飲み会で毎回交わされる大人達の会話って、正直どう思いますか?

S: 自分の知らない社会が垣間見えて面白いです。アマオケとの仕事では、音楽以外の畑で仕事されている方々と交流できるので、貴重です。

自分の性格を一言で言うと?また、その性格で損したこと、得たことは?

S: 性格と言うより好みかもしれませんが、本当は、人がいない静かなところで、一人きりで仕事する、職人さんのような生活に憧れています。指揮者の仕事は常に多くの人々と関りながら、スケジュールと睨めっこなので、全く正反対ですが...自分はそういうところではドジばかりやるので、指揮者向きではないのかも...でも、いつも誰かに助けられてきましたので、「得な性格」かもしれません。

さっき答えた「理想の女性」って、もしかして彼女?

S: そんな人が本当にいたら奇跡です!

*

この演奏会を終えてすぐ、彼はウィーン留学へと旅立つ。関西では既に華々しい活躍を始めたよう

に見えるが、まだまだ修業の身、これからである。彼の地で彼がどのような変貌を見せてくれるのか、本当に楽しみだ。

体は小さいが、器はとてつもなく大きい。

*

ウィーン留学に際しての不安は?

S: 外国語もオペラもできないこと。入学試験が終わった後、指揮科の合格者が集まって夜通しパーティをやったんですが、ヨーロッパの人たちは殆どのオペラを全幕知っていて、始めから終わりまでぶっ通しで、何時間でも歌えるんですね。もちろん原語で。すごかったです。

それと食事、日本のごはんを食べたい!

何年の留学予定ですか?

S: 正規の学生は修養年限がすごく長いのですが(6年以上?)先生方のアドバイスで、たぶん3年くらいになると思います。まだはつきりませんが、3年次くらいに編入してもらえるかもしれません。

その後はどんな風?

S: できれば場所を変えて、さらに2~3年、海外で勉強したいと思っています。ローム財団からいただける奨学金が最長4年ですので、可能かどうか分かりませんが...

最後に...将来の夢を語って下さい。

S: 信頼関係を築いた優秀なオーケストラと、リハーサルに十分な時間をかけて上演する...そういう演奏活動ができるようになれば、すばらしいと思います。そんな仕事は、よほど大物の指揮者にならないと難しいとは思いますが...それと、これも無理とは思いますが、

ピアノ奏者としても多少の活動ができれば理想です。

はじめにフルトヴェングラーのことを述べましたが、小さいころ良く聴いたレコードは、おおむねその時代のものでした。ところが、その時代の音楽と今の音楽の間には、何となく不連続と言うか、空白があるような気がします。戦争の影響かもしれませんが...。非常に曖昧なのですが、この空白にあるべきだったものを見つけ、そこから自分の道を見出したいという願望があります。

伊藤先生どうもありがとうございました。

*

20年ほど前に上映された映画、「トスカニーニ」を思い出す。うろ覚えの1シーンであるが、「私は神など信じない。」と言う若きトスカニーニに対し、修道女が応える。「いいえ、あなたは既に神と出会っています。」伊藤先生が幼い頃宇宙の中心に見出したものも、あるいは神だったのだろうか...

彼の中に天性の才能、人格、ルックス、そして強運を見るとき、私たちは彼が「何事かを成す男」であることを予感する。近い将来、彼は必ずクラシック界に爽やかな新風を巻き起こしてくれることだろう。

若きホープ、伊藤翔に注目せよ!!



第7回(1981年)

柏岡 亨(トロンボーン)

1981年の夏、中学校時代同じ吹奏楽部に居た友人から電話がかかってきました。「今入っているオーケストラでトロンボーンが一人足りないので一度吹きに来ない?」中学、高校、大学、社会人と15年以上吹奏楽に入り込んでいて、ちょっと手詰まり間も出てきた頃だったのですが、オケのトロンボーンなんて休みばかりみたいだしどうかな、と思いつつ初めてオーケストラの演奏会に出たのが、その年の11月の第7回定期演奏会でした。曲目は「ウインザーの陽気な女房たち」サンサーンスのオルガン付き」です。個人的には幸運な選曲でした。存在感の示せる楽器の演奏者として、また舞台上の聴衆として音楽を楽しめた、今から考えればその後の24年間を決定づける演奏会でした。パイプオルガンのある会場

第32回(2001年)

川井 裕史(ヴァイオリン)

第32回定期演奏会はマーラーの交響曲第5番とヨハン・シュトラウスのワルツとポルカ5曲という異色の取り合わせ、指揮は当時常任指揮者だったズラタン・スルジッチ先生。

選曲の過程(当時私は選曲委員の一人であった)の中で、まずメインのマーラーが決まった。第29回定期演奏会(この演奏会がスルジッチ先生との初顔合わせであった)のブルックナーの交響曲第7番の大成ももあり、またそろそろ大曲を、という気運が高まっていたのだ。そこで問題になったのは、何の曲と組み合わせるかであった。

橋本徹雄

常任指揮 [1978 ~ 1992]



では無く、旧の郵便貯金会館のひな壇最上段の左右端にスピーカーを立て、大音量と共に演奏した事が思い出されます。

その後、もうすぐ演奏会という時期にコンサートミストレスの方が退団され大慌てした演奏会や、演奏会前日の練習時に当時の指揮者の方があまりの団員の集まりの悪さに、「皆さん、明日は本番なんですよ。これで大丈夫なんですか...」と嘆かれたり、本番当日の朝に幹部同士で大げんかになったり、曲順を間違えて出てきてあわてて引っ込んだ団員がいたり、舞台上でひな壇から落ちそうになった団員が居たり...などなど演奏以外で記憶に残る演奏会や、もちろん「ローマの松」展覧会「第九」、日蘭、オペラなど曲目で記憶に残る演奏会も多々ありますが、やはり一番は、オーケストラの中でトロンボーン演奏者としての魅力を与えてくれた第7回が一番記憶に残る演奏会です。

この問題に実に斬新な解決を示唆してくれたのがスルジッチ先生。同じくウィーンで活躍したヨハン・シュトラウスの曲をあわせてはどうか、と。しかも、前半がマーラー。そうすると残りのシュトラウスは長い長いアンコールとなって、美しくも楽しい演奏会になるだろう、と。この選曲のセンスには全く脱帽であった。

スルジッチ先生の生国クロアチアはこれらの曲が作曲された当時はウィーンを首都とするオーストリア帝国の版図であった。したがって、今でも強くウィーン文化の影響を受けているという。ウィンナワルツには子供の頃から親しんでいるとか。そんなスルジッチ先生から「踊れる」ウィンナワルツの秘訣を直伝されたのはすばらしい体験であった。

第33回(2001年)

細野 巖(クラリネット)

「ゲネプロで大成功したソロは、本番で失敗する...」私たちにはこんなジンクスがあります。ベートーヴェン第九交響曲の1番クラリネットを受け持っていた私は、本番で失敗しないようにゲネプロでは手を抜こう、という姑息なことを考えていました。

そんなゲネプロでの話。常任指揮者スルジッチ先生の第三楽章は、非常にテンポが遅くデリケートです。普段私たちは、先生の指揮を読み取りながら演奏するのですが、先生は序奏が終わると指揮台を降りて、スタスタと客席の後ろまで行ってしまわれたのです。

さて、これは困ったことになりました。1番クラリネットは管楽器群の要。指揮者がいない今、私がオケを引っ張っていくんだ、ぐらいの気持ちが無いと役目は果たせません。手を抜くどころか、それこそ本番より必



清水史広

常任指揮 [1992 ~ 1998]

そしてわれわれ弦楽奏者にとって忘れられないのは演奏会本番でのマーラーの4楽章、アダージエト。弦楽器だけで奏されるこの楽章、映画やCMなどでも多用され有名な曲。この楽章、本番だけ、まさに1回だけ、弱音部分で超の付く弱音での演奏を要求されたのだ。そして生まれた凄まじいまでの緊張感。弾いていて鳥肌ものの演奏であった。

演奏会の後、スルジッチ先生を自宅までお送りしたのだが、その時、アダージエトはまさに鳥肌が立つ演奏だった、練習ではあんなに凄い演奏は一度もなかった、と話す、「あれは一度だけでいいでしょう? 毎回では神経が持たないでしょう?」とおっしゃったのがとても印象的である。

死になったのです。それにしても先生は、客席の後ろで何をされているのだろうか?

やがて曲は展開部に差しかかりました。大きくテンポが変化するので、指揮者がいなければオケが崩壊しかねません。しかし...先生はそこから動きませんでした。私たちはお互い顔を見合わせながらテンポを確認し合い、そしてなんとか乗り切ったのです。

その時突然、私は先生の考えが分かったような気がしました。「私は今まで出来る限りのことを教えてきたし、あなたたちも十分に私に付いてきてくれた。だけど、あなたたちだけで音楽を創る姿勢も身に付けて欲しい。」そう、この演奏会は、先生最後の定期演奏会だったのです。私は感動のあまり、泣きそうになりました。

私は外国語が全くダメなので、先生の本当の意図を確認できませんでした。しかし今でも、その時の緊張感とともに感動が蘇ってくる思い出です。

わたしの定期演奏会

1974年の創団以来、積み重ねられてきた定期演奏会の歴史。それぞれに思い出がいっぱい詰まっています。5人の団員に、特に印象深かった定期演奏会について語ってもらいました。



ズラタン・スルジッチ
常任指揮 1998～2002]

と一緒に練習したのは本番直前のリハーサルだけで、プロ楽団のような度胸の要るやり方は初めてでした。

次にドボルジャークの新世界を演奏しました。何度も演奏した名曲ですが、この時は演奏気分が違いました。アンコールにグロウフェのグランドキャニオンより「山路にて」を演奏しました。グランドキャニオンへ行った時の風景が目に見え、アメリカ文化にどっぷり浸かった1日でした。

第34回(2002年)

川端 成彬(ヴァイオラ)

私は昭和56年3月の演奏会から参加しました。定期演奏会には第7回から出ています。

どの演奏会も懐かしいですが、ヨーロッパの音楽が殆どだったので、アメリカ音楽特集を組んだ第34回は新鮮で、アメリカに1年滞在した経験もあって、このプログラムには特に惹かれました。バーンシュタインの喜歌劇「キャンディード」序曲に続いてガーシュインの「パリのアメリカ人」を演奏しました。この曲が取り入れているジャズが特に魅力的でした。約束通りにスイングをしました。練習してありましたが、本番中のスイングが最も派手でした。楽器を手に今にも踊り出しそうな雰囲気、指揮をした四野見和敏さんは顔を真っ赤にしていました。ふと客席を見ると、お客様が頭や身体で拍子を取っておられ、お客様の乗りを実感しました。四野見さんは、こんなに盛り上がった演奏は初めて、と興奮気味に話していました。

続いてヴォーカルの中西圭三さんが登場し、バーンシュタインのミュージカル「ウェストサイド物語」から「マリア」と「どこかで」、ガーシュインの歌劇「ボギーとベス」より「必ずしもそうじゃない」と「眠れぬ想い」を演奏しました。素晴らしい歌でした。私達は何度も練習するのが通例ですが、中西さん

第39回(2005年)

岡 恵子(ヴァイオラ)

ヴァイオラという楽器はオーケストラにおいては内声(簡単に言えば伴奏)を担当し、メロディを連続して奏でることは殆どなく、縁の下のような力持ち的な存在なのです。そのためか、一般的には温和な性格の人たちが多く、ほのぼのと演奏しています。ご多聞に漏れず、関西シティーフィルのヴァイオラパートも、そんな人達の集まりです。(ちなみに楽団一、老若男女の幅も広く、おじいちゃまと孫達の集まりとも言われています。)

そのヴァイオラパートがほのぼのとしていない状況に追い込まれたのが、第39回定期演奏会でした。この演奏会は、「ローマの謝肉祭」等、どの曲もヴァイオラに主旋律が多く、普段注目されないことに慣れているヴァイオラパートにとってはまさに緊張の連続!普段なら難なくかかるピブラートも腕が震えてピブラート。肩に力が入って指もスムーズに動かない。(その時パートリーダーをさせて頂いていた私が一番緊張していたかも…笑)

さて、これは大変!通常の練習とは別に時間をとって、パート練習を実施する事に。様々なお仕事を持った社会人や学生の皆

さんが、通常練習以外に集まることは大変なこと…ですが、なんと!殆どの方が練習に参加されているではありませんか。私は、皆さんの音楽に対する熱意に励まされ、「これはいける!」と思いました。そして迎えた演奏会本番。指揮台のゴギさんから笑顔が生まれます。この瞬間、ヴァイオラパートの皆さんに感謝の気持ちで一杯になると同時に、忘れられない演奏会となりました。今回の演奏会も、今まで以上に難曲ですが、若いパートリーダーを中心に皆、一丸となって頑張っています!どうか暖かく見守って下さい。

来し方を省みて



松田 斉
トロンボーン

今年5月に団長を退任して、「やっとプログラムの原稿を考えんでもえーようになった」と思っていたら、突然!運営委員長から「40回記念に当って団の足跡を振り返るような一文を書いてくれないか」という依頼がありました。

「そんなん、自分の業績を披瀝してのように思われたらアカンから、誰か他の人に書いて貰われへんか」と一旦お断りしたのですが、「これまでのウチのオケの歴史を、コンサートを聴きに来て頂く方達や、とりわけ当団の過去を知らない若い団員の人達に知って貰いたい、それを書ける人は他にない!」とか何んとか煽られて、結局私が書かせて頂くことになりました。

戦後の混乱期、音楽に飢えていた人々の手によって、関西のあちこちでアマチュアオーケストラが出来ては潰れることの繰返しがあり、メンバーもあちこちのオケで掛け持ち出演をするのが当り前の時代から、1970年代に入って、アマオケにもようやく各方面で定着の兆しが出始めた頃、阿保現団長をはじめ、関西の各大学オーケストラの経験者が中心となって『何処のアマオケにも負けないような、いい音のするオーケストラをつくらうではないか』との想いから造られたのが当団(当時は関西OB交響楽団)の始まりであったと聞いております。

しかし、現実とはなかなか理想通りには行かなかったようで、私が当団に入団した時は、丁度団の結成から2年近くが経ち、団結成当時の高い理念に燃えて居られたであろう諸先輩も散りぢりになり、新入りの私から見て「意識は高いが 覇気のない集団」であったように思います。(諸先輩には失礼の段お許し下さい)

省みますと、私がこの団に加わったのは1977年の2月初め、第2回目の定期演奏会を前年11月末に済ませて、次のコンサートに

向けての初練習の日でした。即ち2ヶ月以上全く練習をしていなかったということで、この一事をみても当時の練習が如何にのんびりしたペースであったかが伺えると思います。

その当時は隔週の土曜日が練習日で、逆の隔週に練習のある某オケと多くの団員が重複しており、指揮者まで掛け持ちという、謂わば二分の一オーケストラと言っても過言ではないような状態でした。

ただ、発起人の方のご尽力のお陰で、練習会場として大フィルの練習場(扇町プールスタンドの下、コンクリートが剥き出して、雨漏りのため方々にバケツが置かれている)といった、関西のメジャーオケの練習場としては酷いものでしたが、タダ同然で使わせて貰い、譜面台や打楽器も大フィルのものをお借りしていたので、練習会場の心配をすることなく、また財政面も何とかやっていっていたように思います。(この頃、団の所有財産は、個人から譲りうけたコントラバス2台、あと新品の楽譜数曲だけだった)

こんな「ぬるま湯」状態の中、心有る人たちの提案で、練習日を毎週設定し、指揮者もプロの先生を常任としてお迎えしようということになり、'78年秋に初代常任指揮者に橋本徹雄先生を迎え、ようやく一人前のオーケストラとしての体裁が整ったのではなかったかと思えます。(この後'88年からはコンサートマスターにもプロを招請した)

この時期は、定期演奏会は年1回で、あとコンツェルトや独唱のためのコンサートが1回あり、'82年からは「日本ライトハウス主催のチャリティーコンサート」をやらせて頂くことになり、このコンサートが翌年から新築のザ・シンフォニーホールに移ったこと、高名なヴァイオリニスト和波孝禧氏と協演できることから、団員の気持ちは定期演奏会よりもむしろこちらに向いていたのではなかったかと思えます。

以後数年は、大きな変化もなく坦々と推移して行きました。(この間にあった大きな出来事といえば、'82年7月、本番の演奏中に当時の団長が意識不明となって倒れ、舞台の上に救急隊員が担架を持って駆け付けるアクシデントがありました)

この或る意味平穩で、刺激も少なかった団の様子が、一変(悪い方向へ)する事態が起こりました。

'87年に、それまで便利に利用させて貰っていた大フィル練習場を立退かねばならぬことになったのです。

急遽練習会場を探し求めましたが、毎土曜日にオーケストラの練習が出来て、大型楽器も保管して貰える処など、そんなに簡単に見付かる筈もなく、やむなく、大阪市内の貸会場を転々とし、果ては市内から相当離れた郊外に練習場を移さざるを得ないことになりました。('88年頃のことです)

このことにより、見る見る団員が練習に来なくなり、本当の団員と言えるのは、せいぜい40名前後で、毎回の練習には30名位しか集らず(例えばVn. 1名、Vn. 3名、Vla. 0名 etc. というようなこともままありました)やむを得ず練習にも音大生のトラを入れる、と言った情けない状態が暫く続き、追い討ちを掛けるように会計係の不祥事が発覚するなど、誰の目にも『OB響も、もう永くはもたない』と映るようになりました。

「座して死を待つ位なら、喻え最後の悪あがきであろうとも、もう一度大阪市内へ練習場を戻そう!」との悲壮な決意で、'89年、上六の近くの貸ホールに練習拠点を移しました。

そのホールも、当初は非常にアマオケの活動に理解を示して呉れて、会場費も格安に抑え、大型楽器もタダで置かせて呉れるという有難い話でしたが(但し、冷房の音の喧しいのには参りました)こもやがて、担当者が代わるにつれてどんどん値を吊り上げられ、今では音楽面だけでなく財政面で完全に破綻状態に追い込まれてしまいました。(この時、団の会計には活動に使える金はゼロに等しく、どうしても必要なお金は団員から借金をして賄う、といった有様でした)

またまた「ここに居ては死を待つのみ」と、阿保現団長のお知り合いの「徳蔵寺保育園」に頼み込み、ご好意により3階のホールとその隣の保育室を練習会場に、4階の機械室を倉庫代わりに使わせて頂くことになり、これが、それまで下り坂を転がり落ちていた当団の運を、上向きに転じる契機となったように思います。('91年頃のことです)

やはり、アマチュアオーケストラにとって練習拠点が如何に大切なものであるかを痛感させられた一事でした。(練習会場はその後も、淀川善隣館、北出音楽事務所と移りましたが常に練習拠点を確保できたことは幸いでした)

私事で恐縮ですが、丁度この時期に私が運営委員長を仰せ付かることになったのは、私にとっては本当に幸運だったと思っています。('91年6月就任)

そして、この時期からオーケストラが早いスピードで変身したのです。

それらを箇条書で列挙してみますと、

1. 団運営規約の改訂と役員会、選曲会議の確立

団運営規約は、'80年頃に制定されたものが有るには有りましたが、団の実状とかけ離れ、全く用をなしていなかったので、'90年にこれを大改訂して、現在の運営規約の原型となるものを制定しました。(その後何度かの改訂を経て現在に到る)

'92年頃からは、この規約に則って役員会(運営委員会・パトリリーダー会議)を定期開催するとともに、選曲会議のルールを

関西シティフィルハーモニー交響楽団友の会 会員募集のお知らせ

当団で「友の会」の会員を募集致しております。会員になられますと 当団主催演奏会のご案内 特別優待価格でのご入場 友の会特別席のご用意 等の特典があります。入会金、会費無料!!

友の会会員 お申し込み方法

- *はがきでの演奏会のご案内をご希望の方.....パンフレットに折込の申し込み用紙にてお申し込みください。お問い合わせは事務局までお気軽にどうぞ 松田 斉 0729-58-4585]
- *メールでの演奏会のご案内をご希望の方.....只今、メールでの演奏会のご案内およびインターネット上でチケットのお申し込みができるよう準備中です(2005年9月中に開始予定)。詳細は当団ホームページをご覧ください。折込の申し込み用紙ではお申し込みできませんので、ご注意ください。
- ・友の会のみならずの個人情報、演奏会のご案内など、当団の諸活動に關係する用途以外には、一切利用致しません。

確立しました。(選曲会議については'96年に再改訂が行なわれ現在に到る)

2. 日本アマチュアオーケストラ連盟への加盟

この連盟に加盟したことによって、トヨタ コミュニティ コンサートを開催できることとなり、私共アマチュアオーケストラ単独では、到底開催不可能なオペラの上演も3回経験することが出来た他、ソリストの招聘等、トヨタ自動車のコンサート支援により財政面でも随分潤い、楽器の充実を図ることが出来ました。

3. 常任指揮者に清水史広先生を迎える。

'92年、当時26才で、関西二期会の副指揮者をしておられた清水史広先生を常任指揮者として迎え、若さと情熱あふれるご指導により、それまでマンネリ状態にあった練習風景が一変し、練習に快い緊張感が漲るようになりました。

清水先生には'98年まで常任指揮者としてオペラをはじめ多くのことを学ばせて頂き、当団の音楽水準の向上に多大な貢献をして下さったことは特筆すべきことと思います。

4. 団名の改称

'94年、創団20周年を機に、団員からの公募と、全団員による投票の結果、団の名称を「関西OB交響楽団」から現在の団名に改称いたしました。

これにより、従前は『どこかの大学のOBオケか?』との誤解があったのが払拭され、若い優秀な団員を多く集めることに効果が大きかったと思います。

(この翌年には、年間30名の入団者がありました)

5. 定期演奏会を年間2回開催(協奏曲のためのコンサートとの決別)

私が入団した'77年から始まった「協奏曲のためのコンサート」は、音大などを出て『一度は協奏曲に挑みたい』と思っておられる人達(主にピアニスト、稀に声楽家やヴァイオリニスト)から、チケット負担金と称するお金を頂戴して協奏曲ばかり3~4曲をまとめて一つのコンサートとするもので、ソリストの希望があれば、どんな曲でもやる。当時のオケの腕にはお構いなくといった、無茶なコンサートでした。「もっとアマチュアは、真摯に音楽と向き合うべきだ」との思いで、'92年でこの種のコンサートを排し、'94年から定期演奏会を年間2回開催することにしました。

6. ザ・シンフォニーホールでの定期演奏会開催

定期演奏会の会場は、第1回の御堂会

館以来、郵便貯金会館(現存せず)、森ノ宮ピロティホール、大阪国際交流センターと移ってきましたが、団員の数も増え、団員の音楽に対する意識も高まるにつれ、「ザ・シンフォニーホールで定期演奏会を!」との要望が団の内外から多く寄せられるようになり、財政面ではまだまだ不安はあったものの「何事も前に向いて進まんだら道は開けへん!」と、将に「清水の舞台」ならぬ「シンフォニーホールの舞台へ飛び降りる気持ちで」'96年の第24回定期から会場を、ここ「ザ・シンフォニーホール」に移しました。

それまでの大阪国際交流センターの収容人員は約千名に対し、この収容人員は約千七百名、この差が果たして埋まるだろうか、との心配をよそに、会場は満員!もう少しでお客様をお断わりしなければならぬ寸前でした。

そして、この日演奏した当団にとってははじめてのマーラー(第1番)も大好評を頂き、コンサート終了後の打ち上げで「俺等、夢見てんのんと違うやろなあ!」と、阿保さん(現団長)と手を取り合ったことを覚えています。

7. スルジッチ先生を常任指揮者を迎える

'92年から'98年2月のオペラ「椿姫」まで6年間、当団を育てて下さった清水先生が去られることになり、後任の常任指揮者を探していた処、「大阪教育大学で指揮を教えておられる外国人の先生をお願いしてみてもどうか」との話がありました。

先生の経歴を見て「こんな偉い先生にアマオケの指揮をして呉れと言っても無理な相談やろ!」と思いましたが「当ってみるとわからへん、ダメモトで頼んでみたらどうや」と言うことで、行って貰った処、「快く引き受けて下さった」との報告を受けて大変有難いことだと嬉しく思いました。

こう書くと、団員の中から「ええ格好言うな!ほんまは困ったやろ!」との声が聞こえるような気がするので、敢えて弁明しますと「英語はサッパリ判らんでも、以心伝心で何とかなるやろ!」と聞き直していましたし、事実それでいけたと思っています。余談はさておき、このスルジッチ先生のご指導を受けたことによって、当団の音楽的水準は飛躍的に伸びたと思われまふし、先生の人柄と芸術性に団員皆等しく感動を受け、それまでの音楽指揮者をめぐる不協和音も全く無くなり、団が大きく纏まることのできたのも先生に負うところが大きかったと思います。

スルジッチ先生には、'98年の秋から'02年6月までご指導を受け、その後'03年12月にも池田市の招聘で、クリスマスコンサートの指揮をして頂き、今年も11月に当

団を指揮するために、はるばるヨーロッパから駆けつけて下さいます。

8. 池田市ファミリーコンサートの定期開催

'00年5月、オランダからアマチュアオーケストラがやって来て、私共のオケと日蘭交流ジョイントコンサートを池田の「アゼリアホール」で開催させて頂いたご縁から、その後も毎年ファミリーコンサートを池田市との共催で開催する栄を賜わり、我々が敬愛するスルジッチ先生をヨーロッパから呼び寄せて頂く等、定期演奏会とは一味違ったコンサートとして、今では団の年間スケジュールの一環に組み込まれています。

9. 城東区との深いご縁が出来たこと

当団の練習拠点として、'94年から'01年まで大変便利に利用していた淀川善隣館が建物売却のため閉館となり、丁度時を合わせたように城東区に新築された現練習拠点の北出音楽事務所をお借りすることが出来、本当にラッキーでした。また更に有難いことに、「地元」との親近感から「城東区民コンサート」のご依頼を03年12月にお受けして以来、「区民コンサート」の他、区民ホールでの「公開リハーサル」等、地元の行政機関からの大きな信頼を頂戴していることは、誠に有難い限りだと思っております。

さて、ここまで当団が誕生してより、最近に至るまでを省みて参りましたが、当団の現状に思いを馳せるとき、本当にこれがあの「関西OB交響楽団」の今の姿なのかと感無量というより他に言葉がありません。

音楽面だけでなく、組織面でも本当にすばらしい団体に成長しました。

このことは、昨夏の全国アマチュアオーケストラフェスティバル大阪大会で、大会主管団体として大会運営を細大洩らさずほぼ完璧にやり遂げたことで明快に実証されました。

私は、この団の中核に十数年に亘って拘らせて頂いたことをこの上なく幸せに感じ、また誇りに思っております。

終わりに当り、この長文を最後までお読み頂いた団員の方達に一言お願いをしておきたいのです。

ここまで私が書いたことは、当団の歴史の1コマ1コマを連ねた映画フィルムのようなものです。このフィルムを間違っても逆返しにすることがあってはならないのです。

坂道は登るときは労力も要り、時間も掛かりますが、落ちるときはアツという間です。

これからも、日本一のアマオケを目指して常に上に向かって進んで行くことではありませんか。

団員募集の
お知らせ

打楽器
ヴィオラ
バスーン

急募

練習日時 毎週土曜日、夜6:30~9:30
練習場所 北出音楽事務所(JR・京阪「京橋駅」から徒歩10分)
お問い合わせは事務局まで。[0729-58-4585]
なお、当団のホームページでも最新の団員募集情報を公開しております。

<http://orchestra.musicinfo.co.jp/~kcpo>

関西シティフィルハーモニー交響楽団ホームページのご案内

関西シティフィルハーモニー交響楽団のホームページは「クラシック音楽情報センター」(<http://www.musicinfo.com>)より、サーバーの無償使用の協力を得ています。

1975 活動記録 2005

第1回定期演奏会

1975年12月12日、御堂会館
指揮 桂豊、内田博重
ワーグナー:「ニルンベルクの名歌手」前奏曲 グリーク:ピアノ協奏曲(ピアノ 金沢加寿子) ドヴォルジャーク:交響曲第9番「新世界より」

第2回定期演奏会

1976年11月28日、郵便貯金会館
指揮 井町昭
ウェーバー:「魔弾の射手」序曲 リスト:ピアノ協奏曲第1番(ピアノ 大浜淳子) ブラームス:交響曲第2番

ピアノ協奏曲の夕べ

1977年5月23日、郵便貯金会館
指揮 井町昭、内田博重、尾河原明二郎
ベートーヴェン:ピアノ協奏曲第3番 他

第3回定期演奏会

1977年11月23日、国民会館
指揮 井町昭
メンデルスゾーン:交響曲第4番「イタリア」 モーツァルト:ピアノ協奏曲第20番(ピアノ 公文宏子) シベリウス:「カレリア」組曲 リスト:ハンガリア・ラプソディ第2番

ピアノ協奏曲のためのコンサート

1978年6月3日、郵便貯金会館
指揮 井町昭、内田博重、尾河原明二郎
グリーク:ピアノ協奏曲 他

第4回定期演奏会

1978年11月26日、郵便貯金会館
指揮 橋本徹雄
リスト:交響詩「レ・プレリュード」 マクダウェル:ピアノ協奏曲第2番(ピアノ 栗田雅代) チャイコフスキー:交響曲第5番

期待されるソリストのコンサート

1979年6月10日、郵便貯金会館
指揮 橋本徹雄
パッサリ:チェンバロ、フルート、ヴァイオリンのための協奏曲 他

第5回定期演奏会

1979年12月16日、ピロティ・ホール
指揮 橋本徹雄
メンデルスゾーン:序曲「フィンガルの洞窟」 スクリャービン:ピアノ協奏曲(ピアノ 笠井訓子) ブラームス:交響曲第1番

春のポピュラーコンサート

1980年4月12日、国民会館
指揮 橋本徹雄、尾河原明二郎
ベートーヴェン:交響曲第5番 他

羽ばたけ鍵盤の妖精たち

1980年7月8日、ピロティ・ホール
指揮 橋本徹雄
モーツァルト:2台のためのピアノ協奏曲 他

第6回定期演奏会

1980年11月10日、ピロティ・ホール
指揮 橋本徹雄、尾河原明二郎
チャイコフスキー:「1812年」メンデルスゾーン:ヴァイオリン協奏曲(ヴァイオリン:野田玲子) ドヴォルジャーク:交響曲第8番

ク:交響曲第8番

春のポピュラーコンサート

1981年3月14日、ピロティ・ホール
指揮 橋本徹雄、尾河原明二郎
シューベルト:交響曲第8番「未完成」 他

ピアノ協奏曲の夕べ

1981年7月18日、ピロティ・ホール
指揮 橋本徹雄
チャイコフスキー:協奏曲第1番 他

第7回定期演奏会

1981年11月22日、郵便貯金会館
指揮 橋本徹雄、尾河原明二郎
ニコライ:「ウインザーの陽気な女房たち」序曲 ベートーヴェン:ピアノ協奏曲第5番 皇帝(ピアノ 長崎真紀子) サン=サーンス:交響曲第3番

日本ライトハウス・チャリティー・コンサート

1982年3月26日、毎日ホール
指揮 橋本徹雄、尾河原明二郎
メンデルスゾーン:ヴァイオリン協奏曲(ヴァイオリン:和波孝禧) 他

協奏曲とオペラ・アリアの夕べ

1982年7月10日、ピロティ・ホール
指揮 橋本徹雄
ラヴェル:ピアノ協奏曲 他

第8回定期演奏会

1982年11月14日、ピロティ・ホール
指揮 橋本徹雄
ワーグナー:「ニルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲 ラフマニノフ:パガニーニの主題による狂詩曲(ピアノ 橋本和代) ベートーヴェン:交響曲第3番「英雄」

日本ライトハウス・チャリティー・コンサート

1983年4月24日、ザ・シンフォニーホール
指揮 橋本徹雄、尾河原明二郎
ベートーヴェン:ヴァイオリン協奏曲(ヴァイオリン 和波孝禧) 他

協奏曲と声楽曲の夕べ(サマー・イブニング・コンサート)

1983年7月9日、ピロティ・ホール
指揮 橋本徹雄
モーツァルト:フルートとハーブのための協奏曲 他

第9回定期演奏会

1983年12月10日、厚生年金会館大ホール
指揮 橋本徹雄、尾河原明二郎
リスト:交響詩「レ・プレリュード」 ベートーヴェン:交響曲第9番「合唱付」

第3回日本ライトハウス・チャリティー・コンサート

1984年3月31日、ザ・シンフォニーホール
指揮 橋本徹雄、尾河原明二郎
チャイコフスキー:ヴァイオリン協奏曲(ヴァイオリン 和波孝禧) 他

アフタヌーン・コンサート

1984年7月8日、ピロティ・ホール
指揮 橋本徹雄
ベートーヴェン:ピアノ協奏曲第3番 他

第10回定期演奏会

1985年2月3日、ピロティ・ホール
指揮 橋本徹雄、尾河原明二郎
ワーグナー:「リエンツィ」序曲 モーツァルト:協奏交響曲K.297 チャイコフスキー:交響曲第4番

第4回日本ライトハウス・チャリティー・コンサート

1985年6月9日、ザ・シンフォニーホール
指揮 橋本徹雄、尾河原明二郎

パッサリ:ヴァイオリンとオーボエのための協奏曲(ヴァイオリン:和波孝禧、オーボエ:橋本徹雄) 他

アフタヌーン・コンサート

1985年9月29日、ピロティ・ホール
指揮 橋本徹雄
モーツァルト:2台のピアノのための協奏曲 他

第11回定期演奏会

1986年2月2日、ピロティ・ホール
指揮 橋本徹雄、尾河原明二郎
パッサリ:パッサカリアとフーガ ラフマニノフ:ピアノ協奏曲第2番(ピアノ 橋本和代) ベートーヴェン:交響曲第7番

第3回関西アマチュア・オーケストラ・フェスティバル

1986年3月21日、ザ・シンフォニーホール
指揮 橋本徹雄
サン=サーンス:交響曲第3番「オルガン付」

第5回日本ライトハウス・チャリティー・コンサート

1986年6月15日、ザ・シンフォニーホール
指揮 橋本徹雄、尾河原明二郎
メンデルスゾーン:ヴァイオリン協奏曲(ヴァイオリン:和波孝禧) 他

イブニング・オブ・ピアノ・コンチェルト

1986年9月27日、ピロティ・ホール
指揮 橋本徹雄
モーツァルト:ピアノ協奏曲第23番 他

第12回定期演奏会

1987年2月1日、ピロティ・ホール
指揮 橋本徹雄、尾河原明二郎
チャイコフスキー:幻想的序曲「ロミオとジュリエット」 モーツァルト:オーボエ協奏曲(オーボエ:橋本徹雄) ブラームス:交響曲第4番

第6回日本ライトハウス・チャリティー・コンサート

1987年6月20日、ザ・シンフォニーホール
指揮 橋本徹雄、尾河原明二郎
サン=サーンス:ヴァイオリン協奏曲第3番(ヴァイオリン:和波孝禧) 他

オータム・イブ・コンサート

1987年9月19日、ピロティ・ホール
指揮 橋本徹雄
モーツァルト:ピアノ協奏曲第24番 他

第13回定期演奏会

1988年1月31日、ピロティ・ホール
指揮 橋本徹雄
ベルリオーズ:序曲「ローマの謝肉祭」
モーツァルト:クラリネット協奏曲K.622(クラリネット 大川進一郎)
チャイコフスキー:交響曲第6番「悲愴」

第5回アマチュア・オーケストラ・フェスティバル

1988年3月20日、ザ・シンフォニーホール
指揮 橋本徹雄
ベルリオーズ:序曲「ローマの謝肉祭」

第7回日本ライトハウス・チャリティー・コンサート

1988年6月25日、ザ・シンフォニーホール
指揮 橋本徹雄
モーツァルト:ピアノ協奏曲第20番(ピアノ 土屋美寧子) ラロ:スペイン交響曲(ヴァイオリン 和波孝禧) 他

爽やかコンサート

1988年9月25日、ピロティ・ホール
指揮 橋本徹雄
チャイコフスキー:ピアノ協奏曲第1番 他

番 他

第14回定期演奏会

1989年2月5日、ピロティ・ホール
指揮 橋本徹雄
モーツァルト:交響曲第25番 ドヴォルジャーク:交響曲第9番「新世界より」

第8回日本ライトハウス・チャリティー・コンサート

1989年6月18日、ザ・シンフォニーホール
指揮 橋本徹雄
ベートーヴェン:ヴァイオリン協奏曲(ヴァイオリン 和波孝禧) 他

コンチェルトとアリアの夕べ

1989年9月9日、大阪国際交流センター
指揮 橋本徹雄
クレストン:アルト・サクソ協奏曲 他

第15回定期演奏会

1990年2月4日、大阪国際交流センター
指揮 橋本徹雄
ショスタコーヴィチ:祝典序曲 アルチュニアン:トランペット協奏曲(トランペット:ダニエル・ドワイヨ) チャイコフスキー:交響曲第5番

第9回日本ライトハウス・チャリティー・コンサート

1990年6月23日、ザ・シンフォニーホール
指揮 橋本徹雄
モーツァルト:ヴァイオリン協奏曲第5番(ヴァイオリン:和波孝禧) リスト:ピアノ協奏曲第1番(ピアノ 土屋美寧子) 他

秋麗コンサート

1990年9月30日、ピロティ・ホール
指揮 橋本徹雄
ブラームス:大学祝典序曲 他

第16回定期演奏会

1991年2月23日、大阪国際交流センター
指揮 橋本徹雄
ベートーヴェン:交響曲第4番「田園」 シベリウス:交響曲第2番

第10回日本ライトハウス・チャリティー・コンサート

1991年6月16日、ザ・シンフォニーホール
指揮 橋本徹雄
ブルッフ:ヴァイオリン協奏曲第1番(ヴァイオリン 和波孝禧) 他

秋風を呼ぶコンサート

1991年9月15日、ザ・シンフォニーホール
指揮 清水史広
シューベルト:「ロザムンデ」序曲 他

第17回定期演奏会

1992年2月16日、大阪国際交流センター
指揮 橋本徹雄
ウェーバー:「魔弾の射手」序曲 ショパン:ピアノ協奏曲第1番(ピアノ 倉田晃子) ベートーヴェン:交響曲第5番

光輝くコンチェルト

1992年7月25日、ピロティ・ホール
指揮 清水史広
ヴェエニヤフスキ:ヴァイオリン協奏曲第2番 他

第18回定期演奏会

1993年2月7日、大阪国際交流センター
指揮 清水史広
ワーグナー:「ニルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲 ビゼー:「アラルの女」第2組曲 ブラームス:交響曲第2番

オペラ・ガラ・コンサート

1993年8月28日、ザ・シンフォニーホール
指揮 清水史広
ドイツ・オペラ、イタリア・オペラ抜粋

第19回定期演奏会

1994年2月13日、大阪国際交流センター
指揮 清水史広
ベルリオーズ:序曲「ローマの謝肉祭」
ベートーヴェン:ピアノ協奏曲第1番
(ピアノ 大橋邦康) ドヴォルジャーク:交響曲第8番

第20回定期演奏会

1994年9月15日、大阪国際交流センター
指揮 清水史広
ワーグナー:歌劇「リエンチ」序曲
サン＝サーンス:ピアノ協奏曲第2番(ピアノ 吉山輝) リムスキー＝コルサコフ:交響組曲「シェエラザード」

第21回定期演奏会

1995年4月30日、大阪国際交流センター
指揮 清水史広
シャプリエ:狂詩曲「スペイン」
ドビュッシー:小組曲
チャイコフスキー:交響曲第6番「悲愴」

第22回定期演奏会

1995年9月24日、大阪国際交流センター
指揮 清水史広
サン＝サーンス:アルジェリア組曲
サン＝サーンス:交響詩「死の舞踏」
サン＝サーンス:歌劇「サムソンとデリラ」
より「パッカナール」
ブラームス:交響曲第1番

第23回定期演奏会

1996年2月18日、大阪国際交流センター
指揮 清水史広
モーツァルト:歌劇「後宮よりの誘拐」
序曲
ラフマニノフ:ピアノ協奏曲第2番(ピアノ 田中修二)
ベートーヴェン:交響曲第7番

第24回定期演奏会

1996年9月16日、ザ・シンフォニーホール
指揮 清水史広
シューベルト:交響曲第8番 口短調
「未完成」
マーラー:交響曲第1番 二長調「巨人」

第25回定期演奏会

1997年2月22日、ザ・シンフォニーホール
指揮 清水史広
ベートーヴェン:歌劇「フィデリオ」序曲
Op.72b
ドヴォルジャーク:チェロ協奏曲
Op.104(チェロ:長谷川陽子)
ロッシニ:歌劇「セミラーミデ」序曲
レスピーギ:交響詩「ローマの松」

第26回定期演奏会

1997年9月7日、ザ・シンフォニーホール
指揮 清水史広
スッペ:喜歌劇「詩人と農夫」序曲
モーツァルト:交響曲第36番 八長調
K.425「リンツ」
エロール:歌劇「ザンバ」序曲
ムソルグスキー(ラヴェル編曲)組曲「展覧会の絵」

トヨタ コミュニティコンサート in 大阪

1998年2月28日、ザ・シンフォニーホール
指揮 清水史広
ヴェルディ:歌劇「椿姫」ハイライト

第27回定期演奏会

1998年4月19日、アルカイックホール

指揮 奥村哲也

チャイコフスキー:スラブ行進曲作品31
チャイコフスキー:組曲「クルミ割り人形」作品71a
チャイコフスキー:交響曲第5番 水短調作品64

第28回定期演奏会

1998年9月13日、ザ・シンフォニーホール
指揮 高石治
ストラヴィンスキー:組曲「火の鳥」
1945年版 シベリウス:交響曲第2番 二長調作品43

第29回定期演奏会

1999年3月6日、ザ・シンフォニーホール
指揮 ズラタン・スルジッチ
ハチャトゥリアン:組曲「仮面舞踏会」
より「ワルツ」
チャイコフスキー:ヴァイオリン協奏曲「ヴァイオリン 大谷玲子」
ブルックナー:交響曲第7番

第30回定期演奏会

1999年9月5日、ザ・シンフォニーホール
指揮 ズラタン・スルジッチ
ペヤーチェヴィッチ:フルオーケストラの為の交響曲嬰ハ短調作品41(日本初演)
ショスタコーヴィッチ:交響曲第5番

トヨタ コミュニティコンサート in 大阪

2000年2月19日、ザ・シンフォニーホール
指揮 清水史広
ブッチーニ:オペラ「トスカ」ハイライト

日蘭交流400周年記念 アマチュア音楽家ジョイントコンサート

2000年5月28日、池田市民会館 アゼリアホール
指揮 ズラタン・スルジッチ、谷野里香、ルドルフ・カウマンズ
出演団体 ムジカ・カーベ・ディエム(オランダ・ハーグ市) 豊中市立第三中学校合唱部(大阪府豊中市) 大阪府立池田北高等学校コーラス部(大阪府池田市) 大阪府立池田北高等学校PTAコーラス部(大阪府池田市) コーロ・ピアチェーレ(大阪府池田市) 関西シティフィルハーモニー交響楽団
ルドルフ・カウマンズ:アイスランド組曲 作品78 米原豊(編曲)唱歌メドレー「ふるさと四季」より ヨハン・シュトラウス 世:美しき青きドナウ
チャイコフスキー:交響曲第5番

第31回定期演奏会

2000年9月17日、ザ・シンフォニーホール
指揮 ズラタン・スルジッチ
ファリヤ:バレエ音楽「三角帽子」第2組曲
R.シュトラウス:ホルン協奏曲第1番(ホルン 池田重一) プラームス:交響曲第3番

第32回定期演奏会

2001年3月31日、ザ・シンフォニーホール
指揮 ズラタン・スルジッチ
マーラー:交響曲第5番
ヨハン・シュトラウス:喜歌劇「こもり」序曲
ワルツ:「ウィーン気質」
ボルカ:「雷鳴と電光」
ボルカ:「観光列車」
ボルカ:「狩」

第33回定期演奏会

2001年9月15日、ザ・シンフォニーホール
指揮 ズラタン・スルジッチ
プラームス:大学祝典序曲
ベートーヴェン:交響曲第9番「合唱付」
独唱 浅井順子(Sop)、桐山明子(Alt)、小林正夫(Ten)、石原哲(Bar)、合唱 大阪フィルハーモニー合唱団

トヨタ コミュニティコンサート in

大阪

2002年2月10日、グランキューブ大阪
指揮 佐藤功太郎
ブッチーニ:オペラ「蝶々夫人」全幕

関西シティフィル ファミリーコンサート

2002年6月23日、池田市民会館 アゼリアホール
指揮 ズラタン・スルジッチ
女声合唱 豊中市立第三中学校合唱部(大阪府豊中市) 大阪府立池田北高等学校コーラス部(大阪府池田市) 大阪府立池田北高等学校PTAコーラス部(大阪府池田市) コーロ・ピアチェーレ(大阪府池田市)
ドヴォルジャーク:交響曲第9番「新世界より」
ヨハン＝シュトラウス 世:喜歌劇「こもり」序曲
ボルカ:「観光列車」
ワルツ「ウィーンの森の物語」
ボルカ:「雷鳴と電光」
ワルツ「美しき青きドナウ」(以下アンコール曲)
ボルカ:「狩」
ワルツ「ウィーン気質」
ヨハン＝シュトラウス 世:ラデッキー行進曲(* 女声合唱付き)

第34回定期演奏会

2002年9月16日、ザ・シンフォニーホール
指揮 四野見和敏
ヴォーカル 中西圭三(*)
バーンスタイン:喜歌劇「キャンディード」序曲
ガーシュイン:「パリのアメリカ人」
バーンスタイン:ミュージカル「ウェスト・サイド・ストーリー」より「マリア」
どこかで」
ガーシュイン:オペラ「ボーギーとベス」より「必ずしもそうじゃない」
ドヴォルジャーク:交響曲第9番「新世界より」(以下アンコール曲)
中西圭三:「眠れぬ想い」
グローフェ:交響組曲:「グランド・キャニオン」より「山路にて」
(ヴァイオリン・オブリガート 西田美音子)

第35回定期演奏会

2003年3月16日、ザ・シンフォニーホール
指揮 高昌帥
サン＝サーンス:交響詩「死の舞踏」
(ヴァイオリン:ソロ:西田美音子)
フォーレ:「ペレアスとメリザンド」組曲
ベルリオーズ:幻想交響曲(以下アンコール曲)
ラヴェル:亡き王女のためのパヴァーヌ
ベルリオーズ:ラコッツィー行進曲

第36回定期演奏会

2003年9月14日、ザ・シンフォニーホール
指揮 蔵野雅彦
大栗 裕:大阪俗謡による幻想曲
ヒンデミット:ウェーバーの主題による交響的変容
プラームス:交響曲第4番(以下アンコール曲)
プラームス:ハンガリー舞曲第6番

関西シティフィル クリスマスファミリーコンサート

2003年12月21日、池田市民会館 アゼリアホール
指揮 ズラタン・スルジッチ
シューベルト:交響曲第7番(旧8番)「未完成」
ラヴェル:ボレロ
アンダーソン:そりすべり
ブルー・タンゴ
トランベット吹きの休日
ワルツィング・キャット
ガーシュイン:「パリのアメリカ人」
アンダーソン:クリスマス・フェスティバル(以下アンコール曲)
アンダーソン:シンコペティッド・クロック
ジャズ・レガート
ヨハン＝シュトラウス 世:ラデッキー行進曲

第37回定期演奏会

2004年3月27日、ザ・シンフォニーホール
指揮 伊藤翔
シューベルト:交響曲第7番(旧8番)「未完成」
ブルックナー:交響曲第9番(以下アンコール曲)
グリーク:過ぎ去りし春(「二つの悲しき旋律」より)

第32回全国アマチュアオーケストラフェスティバル大阪大会

2004年8月20日～22日(当団開催主幹)
第32回JAOフェスティバルコンサート in大阪
2004年8月22日、グランキューブ大阪
演奏 - JAO大阪フェスティバルオーケストラ(当団含む)、フェスティバルオーケストラA、M、B

スメタナ:交響詩「モルダウ」
モーツァルト:ピアノ協奏曲第26番「戴冠式」(ピアノ 太田房江)以上指揮 西本智実、ゲストコンミス 赤松由夏) シベリウス:交響曲第2番(指揮 栗田博文、ゲストコンマス 稲庭達) チャイコフスキー:弦楽セレナーデ(指導 森悠子) ムソルグスキー(ラヴェル編曲)組曲「展覧会の絵」(指揮 西本智実、ゲストコンミス 赤松由夏)

第38回定期演奏会

2004年9月26日、ザ・シンフォニーホール
指揮 蔵野雅彦
チャイコフスキー:イタリア奇想曲
イッポリトフ＝イヴァノフ:組曲「コーカサスの風景」
ベートーヴェン:交響曲第3番「英雄」(以下アンコール曲)
エルガー:行進曲「威風堂々」第1番

第3回ファミリーコンサート「世界音楽めぐり」

2004年11月28日、池田市民会館 アゼリアホール
指揮 高昌帥
独唱&独奏 西原綾子(Mez-Sop)、大岡 仁(Vn)、石橋栄実(Sop)、矢崎真理(Pf)

ビゼー:歌劇「カルメン」より前奏曲、八バネラ、間奏曲、ジプシーの踊り(* 独唱 西原綾子) サラサーテ:ツイゴイネルワイゼン(独奏 大岡 仁) ヴィラ＝ロボス:ブラジルの風(第5番)より「アリア」(独唱 石橋栄実) ガーシュイン:ラプソディー・イン・ブルー(独奏 矢崎真理) 外山雄三:管弦楽のためのラプソディー 高昌帥:コリアン・ダンス 管弦楽のための「初演自作自演」
ラフマニノフ:ヴァカリーズ J.シユトラウス 世:ピッチカート・ボルカ
チャイコフスキー:イタリア奇想曲(以下アンコール曲)
エルガー:行進曲「威風堂々」第1番
ドヴォルジャーク:スラブ舞曲 第10番(マズルカ) 外山雄三:管弦楽のためのラプソディー(八木節のみ)

第39回定期演奏会

2005年3月21日、ザ・シンフォニーホール
指揮 ギオルギ・パプアゼ
ベルリオーズ:「ローマの謝肉祭」序曲
デュカス:交響的スケルツォ「魔法使いの弟子」
フランク:交響曲二短調(以下アンコール曲)
ビゼー:「アルルの女」第1組曲より「アダージェット」
「アルルの女」第2組曲より「ファランドール」

フランス音楽名曲コンサート オーケストラと映像のファンタジー

2005年4月16日、池田市民会館 アゼリアホール
指揮 ギオルギ・パプアゼ
フランク:交響曲二短調
ベルリオーズ:「ローマの謝肉祭」序曲
サン＝サーンス:動物の謝肉祭(ピアノ 矢崎真理、岡本佐紀子) デュカス:交響的スケルツォ「魔法使いの弟子」(以下アンコール曲)
ビゼー:「アルルの女」第1組曲より「アダージェット」
「アルルの女」第2組曲より「ファランドール」

関西シティフィルハーモニー交響楽団

VIOLIN

西田 美音子
 稲谷 亜季子
 岩井 哲也
 上阪 美保子
 岡崎 雅樹
 小野寺 慶太
 加藤 孝司
 加藤 裕紀子
 川井 裕史子
 河盛 晶子
 神田 靖子
 北村 栄祥子
 斎藤 良子
 佐向 恵子
 隅谷 恭浩子
 高橋 幸子
 豊島 直子
 中川 雅登子
 中谷 日出夫
 中谷 道代
 難波 千里
 西川 友理子
 西村 悠美
 橋本 敏彦
 花村 美佳
 平下 祐子
 廣瀬 知華
 藤田 恵子
 森川 裕弓
 山本 真弓
 吉岡 弓子
 市野 桂子
 中谷 葉子

VIOLA

秋山 久雄
 井戸 義訓
 入江 隆
 太田 真紀子
 岡 恵子
 川端 成彬
 田中 景子
 戸井田 隼
 坂東 佑二郎
 福田 文治
 松本 光世
 宮崎 友彰
 岩井 英樹

VIOLONCELLO

安彦 郁
 阿保 幸雄
 阿岩 倫和
 上田 真紀子
 奥野 平人
 坂元 正三
 澤瀬 研介
 豊島 正誠
 富樫 本美
 橋本 美代
 廣瀬 恵子
 藤井 綾

DOUBLE BASS

稲葉 杏子
 岡田 志穂
 隅谷 正一
 高橋 はるか
 長岡 善正
 萩尾 善正
 安近 紀子
 渡辺 昭一
 盛田 創
 福田 香絵

FLUTE

姜 愛順
 芝野 均
 多田 博史
 丹波 博子
 藤井 範子

OBOE

岡田 啓
 勝山 貴美子
 酒井 洋
 波留 ひとみ

CLARINET

栗山 明子
 芝野 範子
 細野 巖子
 山中 聡子
 打田 正樹

BASSOON

市川 里美
 一ノ瀬 圭子
 上川 畑良子
 山科 みどり

HORN

安彦 高志
 織田 克洋
 中谷 星子
 廣橋 麻理子
 山科 幸生
 友田 拓
 津川 誠
 山部 義幸
 吉岡 基

TRUMPET

残熊 祐治
 西川 倫史
 廣橋 誠司
 森田 修二
 山田 浩之

TROMBONE

柏岡 亨
 金昌 信
 松田 斉
 正岡 千明

TENOR TUBA

山内 由香

TUBA

藤川 健

PERCUSSION

川人 玲子
 田村 千春
 上柿 泰平
 富岡 計次
 守 葉子

HARP

鈴木 貴子
 田中 郁子

団長 阿保 幸雄
 副団長 柏岡 亨
 運営委員長 山科 幸生
 チーフパトリージャー 廣橋 誠司
 (兼インスペクター)

インスペクター 小野寺 慶太

総務 坂元 正三
 富樫 雅樹

会計 上田 真紀子
 田村 千春

人事 山本 真弓

広報 細野 巖

IT 岩田 倫和

ライブラリアン 井戸 義訓

渉外 森 修二

友の会 佐向 恵子

会計監査 長岡 豊

相談役 松田 斉

トレーナー 池田 重一
 田野 桂子
 岩井 英昌
 高谷 野里
 田本 撰理
 中林 葉子
 松村 口洋
 松 村 真也
 松 村 洋介

...コンサートミストレス
 コンサートマスター

...パトリージャー

企画 / 編集 / 発行 関西シティフィルハーモニー交響楽団

印刷 株式会社 松岡印刷所

**第4回関西シティフィルハーモニー交響楽団
ファミリーコンサート**

2005年11月20日[日]15時開演
池田市民文化会館アゼリアホール

指揮 スラタン・スルジッチ
合唱 関西シティフィルハーモニー合唱団

チャイコフスキー：交響曲第6番「悲愴」
ヴェルディ：歌劇「アイダ」より凱行進曲 他

* 詳しくはこのプログラムに挟み込んである案内チラシをご覧ください。

**関西シティフィルハーモニー交響楽団
第41回定期演奏会**

2006年3月19日[日]14:30開演
ザ・シンフォニーホール

指揮 ギオルギ・ババアゼ

チャイコフスキー：幻想序曲「ロメオとジュリエット」
リムスキー＝コルサコフ：スペイン奇想曲
メンデルスゾーン：交響曲第3番「スコットランド」

* 曲目は変更になる場合があります。